「言われる」受身文の使い方について

許　明子

要　旨

日本語の受身文の中には受身文の述語として使われやすい動詞があるが、その代表的な動詞に「言われる」がある。「言われる」受身文は「聞く」と語彙的ヴォイス対立の関係にあるが、聞き手の立場に重点を置きながら、話し手の発話を受けて聞き手がなんらかの心理的変化を起こしたことをも含んで表現する場合に用いられる。

「言われる」受身文には聞き手と話し手の言語活動を表すだけではなく、「文句、不満」などの意味内容が含まれることが多い。その場合は「聞く」という直接的な能動表現を避け、聞き手の感情や心理的な変化を間接的に表現するために「言われる」受身文が用いられる。これは日本語母語話者が日常生活で行う会話の中で、話し手と聞き手の両者の関係を中立的に保ちながらも、聞き手中心の表現を使おうとする日本語特有の表現の一面が現れているものである。

【キーワード】　言語活動　発話行為　「言われる」受身文　話し手　聞き手

About the Usage of *iwareru* Passives in Japanese

HEO Myeongja

【Abstract】There are several verbs which are often are being used as predicates in Japanese passives. *Iwareru* is such a typical verb. *Iwareru* has a voice relation with *yū*, the distinction between the two, however, depends on direction of emphasis of the speaker's or listener's position. In other words, *Iwareru* has the same semantic content as *kiku*, but is used to express a causation of mental change in a speaker's talk.

In many instances the passive sentence which contains *iwareru* not only expresses language activities of a speaker and a listener but also implies the meaning of "having a complaint or being dissatisfied". In this case, a speaker avoids direct indication of *kiku* and expresses his/her feelings and mental state indirectly. Moreover, it is considered that while this kind of passive sentence is the type of expression peculiar to Japanese language, at the same time this structure allows to keep the relation between a listener and a speaker neutral.

1. はじめに

日本語の話し手の発話行為を表す動詞には「言う」「話す」「しゃべる」「語る」などの動詞がある。その中でも特に「言う」の受身形「言われる」（以下、「言われる」受身文）は日本語の話しことばにおいて他の動詞に比べて非常に多用されている。「言われる」受身文の多用に関しては北嶋(1977)[(1)]、奥津(1983)においても指摘されているが、その使用に関する実態については許(1998、1999、2004)[(2)]で詳しく述べている。許(1998：227)では日本語の話しことばと書きことば[(3)]における受身文の使用率の分析を行ったが、その中で「言われる」受身文の使用率は、話しことばでは全体683例の受身文のうち166例で全体の約24.3%を，書きことばでは279例の受身文のうち11例で約4%を占めていることを明らかにした。この結果は、話しことばと書きことばの両面において「言われる」という形が受身文の述語動詞として最も使われやすいことを意味するが、特に話しことばでは全体の受身文の約4分の1を「言われる」受身文が占めている。一般的に，受身文は話しことばよりも書きことばにおいて使われやすい傾向があるが、「言われる」受身文に関しては話しことばで圧倒的に多く使われる傾向があり、書きことばではわずか4%しか使われていなかった。このような結果から、「言われる」のように一つの動詞の受身形が話しことばにおいて極端に多く使われていることは日本語の話しことばにおける受身文の語用的特徴の一面を示唆していると言わざるを得ない。

「言われる」という表現は韓国語では「～(라)고 말하여지다」もしくは「～(라)고 전해지다」に、英語では「to be said, to be told」に訳すことができる。しかし、韓国語と英語においては上記の表現が日本語のように頻繁には使われていない。それでは何故日本語において「言われる」が多用されているのであろうか。本研究では「言われる」受身文が日本語において多用されている原因や、その使い方について考察を行う。

2. 人間の発話行為を表す動詞

人間の発話行為を表す言葉には本研究で取り上げる「言う」以外にも「話す」「語る」「しゃべる」などがある。これらの動詞が持つ辞書的な意味には共通点が多いが、微妙なニュアンスの差があり、異なる使い方をすることがある。まず、これらの動詞が持つ辞書的な意味について考えてみよう。

「言う」が持つ語彙的意味について辞書には次のように記されている（『日本語基本動詞用法辞典』(1993：36～37)）。

① 口を動かして言葉で表現する。
② 文章がある内容を表している。
③ 一般に伝えられていることをそのように伝える。
④ 人や物の名前を伝える。
⑤ ある言葉をある仕方で発言する、または、ある別の言葉で表現する。

⑥　何かが音を立てる。

このように、「言う」という動詞は人間の言語活動の中で発話行為そのものを表すだけではなく、ある文章が表す意味内容や物音まで様々な意味を持って使われる。しかし、最も一般的に使われる意味は人間の言語活動の一環として「言葉で表現すること」(『広辞苑第五版』(1998：111)）である。

一方、『角川類語新辞典』(1976：305）では話し手の発話行為を表す動詞「言う」「話す」「語る」「しゃべる」の語彙的意味について次のように解説されている。

○　言う：「いう」にはほとんど具体的な意味を表さないで、それと同種のものであることを示す用法がある。

○　話す：まとまった意味内容を声に出して言う。

○　語る：まとまった話をする。

○　しゃべる：気楽に口に出して言う。

さらに、これらの話し手の言語活動を表す動詞の使い方について、「「言う」は内容に関係なく、言葉に表現する場合、「話す」「語る」はまとまったことを言う場合に使われる。「しゃべる」は話しことば的で口が軽く、べらべらと話す、口外にする、というような場合に用いられる」と記されている(『角川類語新辞典』1976：305)。このように人間の発話行為を表す類意動詞はいくつかあるが、その中でも「言う」動詞は、物の音や同種の意味内容を伝達する自動詞的な使い方を含めて、話し手の発話行為を表す際に最も幅広く一般的に使われていることが分かる。

しかし、上記の「言う」「話す」「語る」「しゃべる」はそれぞれ能動文として用いられる際の使い方と、受身文として用いられる際の使い方に微妙な意味の違いがある。つまり、「言う」が能動文として用いられる場合、その文は具体的な意味内容を持たず幅広く話し手の一般的な発話行為を表す。

まず、「言う」の受身形「言われる」について考えてみよう。上記の「言う」の辞書的意味の中で①の意味を持って使われる場合は話し手と聞き手の関係が具体化され、なおかつ聞き手に視点が移されることによって発話された文章の意味内容が具体的なものに限定される。また、③の「一般的に伝えられていることを伝える」意味として使われる場合、発話を行う主体や発話を受ける客体にある特定した人物を必要としないことが多い。したがって、そのような「言われる」の使い方では動作（発話行為）を行う話し手や動作を受ける聞き手が明確でない場合や、不特定多数の人の発話行為を一般的な動作として表す際に広く使われる。例えば、次の「言われる」の例を考えてみよう。

○　『イチローに学ぶ天才と<u>言われる</u>人間の共通点』(書名)

○　『英語　うまいと<u>言われる</u>和訳の技術』(書名)

○　『品のいい人と<u>言われる</u>技術』(書名)

○　「幻の酒と言われる酒、購入サイト」（インターネット検索サイト google より）

○　「うまい！と言われるビジネスｅメール入門」（インターネット検索サイト google より）

このように「言う」の受身形「言われる」は主体や客体が特定個人である場合でも、客体が不特定多数の人である場合でも幅広く使われる。実際にインターネット検索サイトで「言われる」が使われている用例を調べてみると、約170万件の用例があり、そのほとんどが不特定多数の主体及び客体を対象に動作を行う用法として用いられていた。

他方、「話す」は動詞の辞書的な意味として、あるまとまった意味内容を表すという用法を持っているため、受身文ではその意味内容が限定されやすく、話し手と聞き手の関係を結びつけることが多い。たとえば、インターネットの検索サイトには次のような「話される」の用例が使われていた。

○　「英語は、イギリス、アメリカのほかカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどで母語として話され、また、世界の多くの地域で公用語・共通語として用いられる」（「ゲルマン語概説」インターネット検索サイト google より）

○　「はじめてのアルザス語［Alsatian］：フランス北東部に位置するアルザス地方で話される言葉で、中世のゲルマン民族の移動の際に、アルザス周辺に広く定住を始めたアレマン族の方言の一つです」（infinisys ホームページでの紹介）

○　「英語は速く話されるとその文の中で弱く発音される部分が、個々の単語をひとつひとつ別々に発音した場合と違った発音で話される現象がおこります。これがリダクション（音の連結・脱落）です。」（英語学習法　フィニック英語学院インターネットページ）

○　「強勢、イントネーション、現代の標準的な発音で話される語を聞きその意味がわかること」（インターネット検索サイト google より）

これらの用例からも分かるように、「話される」受身文では「話す主体」がある特定した個人ではない場合でも具体的に誰が発話行為を行うかが背景にあり、容易に動作主を推測することが可能である。つまり、「話される」が最も多く使われた用例には「ある言語（母語もしくは外国語）を話す」という用例が多く、具体的に「（英語母語話者が）英語を話す」行為を「日本人である日母語話者が客体になる」ことを表す用例が多かったのである。この点において「言われる」受身文の使い方と大きな違いがある。

さらに、「語る」の受身形「語られる」はあるまとまった文がストーリー性を持って表現されることが多い。その用例を見てみよう。

○　「そっと語られる純愛ストーリー」（インターネット検索サイト google より）

○　『語る現在、語られる過去―日本の美術史学100年』（東京国立文化財研究所発行書名）

○　「淡々と語られるキリスト教各派の教派の違い、キリスト教には様々な教派があるが、

それらの教派を簡単にではあるが解説してみようと思う。」（インターネット検索サイト google より）

○ 「アイリッシュの英雄は後生にも語られる/THIN LIZZY」（インターネット検索サイト google より）

これらの用例が使われている文脈からも分かるように「語られる」は「(あるストーリーが) 言い伝えられる」という意味を持って使われることが多く、短編的な一文一文の発話よりまとまりのある文章をつないでその内容を表現する。従って、被害や迷惑の意味を表す例はほとんど使われていなかった。

それに対して、「しゃべる」の受身形「しゃべられる」が使われる例をインターネットから調べてみると、「語られる」とは異なる使い方があることが分かる。

○ 「あなたと付き合うと何をしゃべられるかわからないから」
クラスの成績の良い子が奨学金を受けているってしゃべってはいけない内容だったんですか？（インターネット検索サイト google より）

○ 「生存」が伝えられた 5 人のうち、4 人は皆北朝鮮で結婚し、子供ももうけている。仮にこの拉致被害者達が帰国することになった場合、北朝鮮に子供という「人質」を残していくことになるから、余計なことをしゃべられる心配がない。（インターネット検索サイト google より）

○ 講演やニュースなど、会話ではない一方的にしゃべられる英語はかなりつらい（インターネット検索サイト google より）

○ 「感音性難聴」の場合は、あまり耳のそばで大きな声でしゃべられると、 がんがん響くので、むしろふつうの声で口を大きく開けて明瞭に しゃべって欲しいとのことです。（インターネット検索サイト google より）

これらの用例でも分かるように、「しゃべる」が受身文として使われると話し手の発話行為を受ける客体（聞き手）の立場が特定した個人として表され、被害や迷惑の意味が含まれることが多い。ある特定個人が一方的に話し手の発話を受けることを表すため、言語行為に対する聞き手の不満・不平を表すようになる。また同インターネット検索サイトで「しゃべられる」の用例を調べたところ、受身の意味よりも可能の意味を表す「(英語が) しゃべられる」のような用例がもっと多く使われていた。「しゃべられる」が受身文として使われた場合、直接的に話し手の発話を非難する意味を持つようになるため、読んでもらうことを前提としたインターネットのようなメディアではあまり使われていないようである。

以上、人間の発話行為を表す動詞「言う」「話す」「語る」「しゃべる」の辞書的な意味と受身文として使われている用例を見てきたが、各動詞が持っている語彙的な意味と受身文として使われている際の意味には多少の差があること、また、これらの発話行為を表す動詞の中で、「言う」が最も広く一般的に使われていることが分かった。その理由は「言う」が持って

いる語彙的な意味の広さと、利害の意味において中立的であるためと思われる。それでは、日本の話しことばを中心とした日常生活の会話の中ではどのように使われているのであろうか。この点に注目して、日本のテレビドラマで「言われる」がどのような状況で、どのような意味で使われていたかについて考察を行う。

3.「言われる」受身文の使用に関する実態

本章では上記の許(1998、2004)の分析に基づいて「言われる」受身文の用例の分析を通して、「言われる」受身文の構文的特徴と意味について考察を行う。

3. 1　「言われる」受身文の構文的特徴

本節では許(1998)の調査に基づいて、受身文の構文的特徴を知るために、主語と動作主をそれぞれ有情物と非情物に分けて考え、両者が共に有情物である構文を「＋＋型」、主語のみ有情物である構文を「＋－型」、動作主のみ有情物である構文を「－＋型」、両者共に非情物である構文を「－－型」に分類して、話しことばと書きことばの両面における「言われる」受身文の主語、動作主を中心に構文的な特徴について考察を行う。

以上の基準によってテレビドラマの中で使われた166例の「言われる」受身文を分類した結果、次の＜表1＞のような結果が得られた。

＜表1＞話しことばにおける「言われる」受身文の構文的特徴

動作主＼主語	有情物	非情物
有情物	「++型」　163例	「−+型」　3例
非情物	「+−型」　0例	「−−型」　0例

この表で分かるように、話しことばに使われた「言われる」受身文は主語と動作主が共に有情物である「＋＋型」が極端に多く使われている。話しことばでは話し手の発話に対する聞き手を必要とすることが多く、有情物同士の言語活動が中心になることは当然な結果であると言えるが、「＋＋型」の「言われる」受身文を中心に非常に偏った構文的特徴を有していることが明らかになった。例えば、次のように話し手と聞き手の関係が明確であり、発話者が動作主として明示されている用例が非常に多く使われていた。

(1)のぞみ：講師っていうのも…なるまでの研修料が百万円もかかって…おまけに、自分で生徒を集めて来ないと、一円のお金にもならないの。
　薫之　：そんな…。
　うらら：まさが…。

のぞみ：お母さんに…ほら見ろって言われると思って…言えなかったの。

(2)達也　：うん…わかるよ…。

赤松　：(苦笑) そうか…君みたいな若い子に、わかるよって言われると、こそばいなぁ。

(3)葵　　：だ、だって、春日局に、三年間、結婚は無理だって言われたんでしょう？

のぞみ：言われたけど…両方、頑張ってみようと思って。

これらの用例のような、文の主語である聞き手が＿＿＿の動作主の発話を受ける立場であることが明確に現れている例が最も一般的に使われていた。しかし、話しことばでは前後の文脈によって話し手が容易に推測できる際には省略されることが多く、主語と動作主の関係も前後の文脈に依存することが多い。

また、非情物が受身文の主語となる「－＋型」もわずかながら使われており、「一般的に伝えられていることをそのように伝える」という用法の用例が次の 3 例使われていた。

(4)解説　：みなさんもご存知のバブル崩壊という事がさかんに言われるようになったのは、ちょうどこれから三ヶ月ばかり後の事であります。

(5)鶴田　：この正当防衛の判断は、刑法では、もっとも複雑で微妙と言われている。証言一つで、有罪か無罪かが分かれる事もまれではない。

(6)解説　：それにしても…超難問と言われる司法試験、毎年、五月の第二日曜日、つまり母の日に行われるというのですから…小生、なんだか皮肉めいたものを感じてしまうのであります。

これらの用例では＿＿＿を引いた言葉「バブル崩壊という事」「正当防衛の判断」「司法試験」という抽象的な名詞句について一般的に伝えられている内容を伝達する述語として「言われる」受身文が使われていた。上の用例の中で(4)(6)は解説者の発話であり、話し手と聞き手を必要とする日常生活の会話文とは多少異なるスタイルであることから、話しことばにおいて非情物名詞句が「言われる」受身文の主語に立つことは極めて少ないと言える。本調査の結果でもこのような用例は 166 例の「言われる」受身文の中、ただ 3 例しか使われていなかった。

一方、書きことばにおける「言われる」受身文は話しことばとは異なる特徴が見られた。その分析結果は＜表 2＞の通りである。

＜表 2＞書きことばにおける「言われる」受身文の構文的特徴

動作主＼主語	有　情　物	非　情　物
有　情　物	「＋＋型」　5 例	「－＋型」　6 例
非　情　物	「＋－型」　0 例	「－－型」　0 例

書きことばにおける「言われる」受身文の最大の特徴は受身文の主語となる動作の受け手

が非情物の構文が全体の半数以上を占めていることである。つまり、「（ある物）が（別の抽象的な名詞句）と言われている」のような一般的な内容を伝える用法として用いられることが多かったのである。この違いが話しことばと書きことばにおける「言われる」受身文の最も大きな構文的特徴である。書きことばにおける「－＋型」の言われる受身文は11用例中6例であったが、次のような例が使われていた。

(7)陸上自衛隊が、対人地雷と同じ効果を持ち、遠隔操作で爆発させる兵器を検討している、と報道だ。地雷は「二十四時間眠らない兵器」「悪魔の兵器」などといわれてきた。

(8)同じ土木が日本では醜悪さの見本のようにいわれる。

(9)この会社の危うさがいわれたのは、きのうきょうのことではない。

これらの用例で、主語に立っている非情物名詞句「地雷、土木、この会社の危うさ」などについて一般的に伝えられている内容を伝える述語として「言われる」が用いられている。つまり、発話を行う主体を明確に表現するのを避け、一般的に伝えられていることとして表現することによって、主観的な観点で意見を述べるというより客観的な観点で事実を伝える用法として「言われる」を使う傾向があると言える。書きことばにおける「－＋型」は人間動詞の言語活動を表すというより文章の内容を客観的に伝える表現として用いられているのである。

さらに、「言われる」受身文の「聞き手」、つまり受身文の主語になるものが文中に明示されている用例を調べた結果、話しことばでは166例中18例で約10.8%、書きことばでは11例中7例で約63.6%であった。話しことばでは聞き手が省略されやすいのに対して、書きことばでは聞き手が明示されている用例が多かったのである。話しことばの中で動作主は話し手と聞き手の両者以外にも、主語に立つものが第三者の言語活動を受けたことを表す例も多く、その場合には文中に動作主が明示されている例が多かった。

一般的に日本語では主語あるいは動作主が省略されることが多いが、特に動作主を強調する必要がない場合や前後の文脈によって容易に推測できる場合に受身文が使われやすく、そのような特徴が話しことばにおける「言われる」受身文の多用として現れたのではないかと考えられる。しかし、書きことばにおいては主語に立つ抽象的名詞句が不特定多数の話し手によってどのように伝えられているかについて述べる文が多いため、不特定多数の人物である動作主は省略されやすいと考えられる。

このように話しことばと書きことばでは「言われる」受身文が異なる構文的特徴を有しているが、その違いは文体、主語と動作主の関係、意味的特徴などによるものと考えられる。次節では「言われる」受身文の意味的特徴を中心に考察を行う。

3. 2 「言われる」受身文の意味的・語用的特徴

人間同士の言語活動を表す動詞「言う」は発話者と聞き手の関係の観点から「聞く」と語彙的なヴォイス対立をなしている（野田 1991：218)。一般的に両者のヴォイス対立の観点では、「言う」は発話者に視点をおいて表現する際に、「聞く」は聞き手に視点をおいて表現する際に用いられる。「言われる」は「聞く」と同じく、聞き手に視点をおいて表現する場合に使われるが、受身文の文法的なマーカー「a-reru」が接続して受身の意味を表すようになり、「聞く」とは異なる意味的特徴を有している。つまり、有情物間の動作を受身文として表現する場合は視点の移動だけではなく、動作を受ける客体が動作の影響を受けて、何らかの感情の変化をもたらしたことを表す場合が多い。この点に注目して、「言われる」受身文がどのような意味を持って使われているかについて考察を行い、どのような状況で被害や迷惑の意味を表すか、意味的・語用的な特徴について分析を行う。

まず、前章で述べたように「言われる」受身文が一般的に伝えられていることを伝える用法として用いられた例を見よう。

(10)サチ　：なぁに…？まだ何かあるの？
　のぞみ：私…いつも甘いって言われます…。
　サチ　：そうでしょうねぇ。

(11)のぞみ：取調べって言われると…ちょっと緊張しますね…。
　星野　：確かに、実際に警察に逮捕されている人なんかもいるわけだからな…。そういう意味じゃ、その人の一生に関わるんだよな。

(12)新平　:冷めるから美しいのです。それを罪だと言われるのなら…仕方ありませんな…。

(13)あずさ：そう言えば…よくバカだと言われました。帰って来もしない夫を待って、家を支えて、子供を育てて…バカじゃないの。さっさと家を出て、自由におなりなさいよ…。

上記の用例(10)～(13)の「言われる」受身文の話し手は不特定多数の一般的な人であり、聞き手は受身文の主語である特定個人である。また、これらの受身文で伝えられている内容「甘い、取調べ、罪、バカ」は一般的なことを表す抽象的名詞句であるが、これらの名詞句が「言われる」受身文で表されることによって聞き手と何らかの関係を持つようになったことを表す。つまり、一般的なこととして伝えられている言語内容を聞き手が自分に関連づけて表現するために「言われる」という受身文で表したものである。

前章であげたインターネット等の用例のように、このような用法は書きことばによく見られるが、これらの用例は聞き手が「言われる」受身文が表す発話内容に自分自身を関与させるために用いているのである。例えば、次の用例は、話し手及び聞き手が発話に直接関与しており、特定個人の場合である。聞き手が受身文の主語に位置し、話し手が動作主として文中に現されているが、両者間の言語行為を相対的に表している。

(14)あづさ：私、赤松さんに、一緒になろうって、言われたの。

(15)サチ　：ウチなんてね、小学三年の息子に毎日、犬を飼ってって言われるんだけど…団地だから飼えないの。息子ったらね、犬飼だから飼ってもいいじゃないかって責めるのよォ。

(16)赤松　：何だ、用件は？

のぞみ：は…？

赤松　：話があるんだろう？

のぞみ：はい…。あの…母に…考え直せって言われました。

赤松　：何を？

のぞみ：弁護士になるのを…。

(17)あづさ：私も、のぞみに言われた。お父さん、迎えに行きもしないで、手紙書いて放っておくだけなんて…お母さん、冷たい。

桃子　：キ、キツいわね…それ…。

上の用例は(10)～(13)とは違って、発話を行う話し手とその発話を受ける聞き手が特定個人の二人である。この両者は直接的に発話に関与しているが、発話の受け手がその内容を第三者に伝える際に「言われる」受身文を用いている例である。(14) では「あづさが赤松さんに言われたことをのぞみに、(15) ではサチが息子に言われたことをのぞみに、(16) ではのぞみが母親に言われたことを赤松さんに、(17) ではあづさがのぞみに言われたことを桃子に伝えているのである。これらの用例は、文中に話し手が明示され、第三者に発話内容を伝えるために話し手と聞き手の関係が明示されることが多い。つまり、この種の「いわれる」受身文には発話された言語内容を第三者に伝えるという「情報伝達」の意味が強く、聞き手はその発話内容を伝える述語として受身文を用いているのである。従って、会話を行っている両者が有情物同士であっても主観的な感情の表現を避け、客観的な事実として発話内容を伝えているものと考えられる。以上の(10)～(17)のような使い方は話し手の発話内容について聞き手が自分の感情を排除して、発話内容について中間的な立場として表す場合が多いため、両者の間に利害等の感情は含まれにくい。

それに対して、次の用例では「言われる」という述語の中に「文句・不平・不満を言われる」「発話内容によって迷惑を被る」といった内容が含まれている。

(18)薫之　：でも、着た切り雀じゃあ…ご近所に何て言われるか…。

(19)のぞみ：な、何するんですか！あなたにそんな事、言われる筋合い、ありません！

内海　：何だと！このクソはねっかえり！飢え死にしちまえ！

(20)田中　：あいつ…皮ジャン買おうかなぁ…って話しかけて来たんだ。

のぞみ：……。

田中　：俺が…ローンの算段で女房にブチブチ言われた日だった…。

(21)赤松　：マスコミになんて言われようが、そんなことは関係ない。俺が大樹のために働く限り、人の謗りは受けない。

(22)のぞみ：そ、そんなね…口でペラペラ言われたって、お父さんの事、信じられるもんですか。二十年もブランクがあるのよ。顔も覚えてなかったのよ。

　　徹　　：分かってる。だから、今すぐじゃなくてもいい。今度はお父さんが待つ。だから、いつか許してくれ…。

(23)薫之　：待ちなさい！逃げるの！

　　徹　　：(立ち止まる)

　　薫之　：ちょっと娘に言われたくらいで、逃げ出すの！だったら、今の土下座は格好だけだったの！

(24)あづさ：なんか見付かると思ってバイト始めて見たけど…見付かりそうもないし…家族にはブツブツ言われるし…だったら、隠れ蓑じゃないけど、とりあえず就職してみようってところ、ない？

(25)達也　：親父もこうやって、就職決まらなくて、迷ってたのを、お袋にぐちゃぐちゃ言われて、ヤケ起こしたんだよ…。

　　あづさ：何言ってるの。

上の用例 (18)～(25)は(14)～(17)と同じく発話に関与している話し手と聞き手の両者が有情物であり、両者の立場をヴォイス観点で表している。(18)～(22)は聞き手が話し手の発話を直接的に受けているか、もしくは……を引いた発話の受け手が話し手と聞き手以外の第三者である例である。これらの用例が(14)～(17)と異なる点は、発話に関与している話し手と聞き手の両者が直接的な関係を持っていることである。つまり、前者の用例では発話の内容を第三者に伝える意味を持っていたのに対して、後者の用例では「言われる」発話内容が直接的に聞き手に向けられていることを表しているのである。発話を行う話し手が目の前にいる相手だったり、その場にはいない第三者であったりすることは会話が行われる場面によって異なるが、発話内容が直接的に聞き手に向けられ、それによって聞き手がなんらかの感情を持つようになったことを表す点で(14)～(17)の用例とは異なる語用的特徴を持っている。また、聞き手は話し手の発話内容が自分の内面であったり、性格であったり、振る舞いであったりで、聞き手自身の持ち物の一種として捕えられているため、間接受身文と類似している。聞き手は自分以外の他人に自分の内面的な部分について触れられた発話内容によってマイナス的な心境の変化、もしくは不満や迷惑の感情等を抱くようになったことを表しているのである。

このような点から、「言われる」受身文の発話を受ける聞き手の感情を表す表現が文中に伴われることが多い。(20)の「ブチブチ言われる」、(22)の「ペラペラ言われる」、(23)の「文句を言われる」、(24 の「ブツブツ言われる」、(25)の「ぐちゃぐちゃ言われる」などのよう

な擬態語・擬声語が聞き手のマイナス的な心理状況を強めて表している。このような用例は話しことばにおいて多く使われているが、その理由は日常生活の会話において話し手の発話に対して「(誰) が (私) に文句を言った」のような直接的な能動表現を避け、同様な意味を持ちながら間接的に感情を表現するために受身表現を使うものと考えられる。このような特徴が話し手の「聞く」という言語活動を「言われる」受身文で表現する最も大きな語用的特徴であり、話しことばで多用されている理由の一つであると思われる。

4.　「言われる」受身文の使い方の特徴

水谷(1985：24)は日本語について立場志向型の言語であるとし、「自分自身の身にふりかかることは「わがこと」として報じるべきだという考えが、日本語話者の意識の中に存在している」と述べた。このような話し手の意識を表す表現の一つとして本研究では「言われる」受身文の使い方について考察を行ったが、日本語の書きことばと話しことばにおける語用的特徴の一面が明確に現れた。話しことばにおいて「言われる」受身文が非常に頻繁に使われているが、その理由は主語に立つ聞き手もしくは第三者が話し手の発話に対して自分自身と関係のある事柄として捉えて表現するためだと考えられる。また、「言う／言われる」は人間の言語活動の中で最も基本になる「発話」を表す表現であり、誰の立場でその発話を捉えるか、また相手に対してどのような言語活動を行うかにかかわるため、話しことばで多用されていることは当然のことかもしれない。

さらに、水谷(1985：21)は日本語特有の表現として「聞き手中心的な話者の立場からの表現を好む」と述べているが、「言われる」受身文はこの日本語の特徴を表す端的な表現であると言えるのではないだろうか。日本語の話しことばは聞き手中心の話し方を好むために受身文の使用頻度が高く、発話行為を受ける聞き手の立場からその内容を表現するために「言われる」という受身形が多用されるようになったのではないだろうか。

また、聞き手の立場において話者の言語行為を直接的に表現するのを避け、間接的に表すことによって、両者を関係付けながらも一定の距離を保って、その関係を表現する試みとして「言われる」受身文を多用しているのはないかと思われる。

本研究で行った「言われる」受身文の使い方の分析結果は次の3点にまとめられる。

第一、「言われる」受身文は話しことばと書きことばの両方において多用されているが、話しことばでは話し手と聞き手の両方が有情物である場合が多く、人間同士の言語行為を仕手と受け手の関係から捉えた構文が使われやすい。他方、書きことばではある事柄について一般的に伝えられている内容を他人に伝える用法として「言われる」受身文が使われやすいため、言語活動の対象となる言葉は非情物であることが多い。

第二、話しことばで使われる「言われる」受身文は発話内容を第三者に伝達するという用法と、本人に直接的に向けられていることを表す用法がある。後者の場合は聞き手が話し手

の発話について、直接または間接的な影響を受け、マイナス的な心理的変化を起こしたことを表す例が多く、その際には「ブチブチ、ペラペラ、ブツブツ、ぐちゃぐちゃ」等の擬音語・擬態語を伴ってその意味内容を強めて表現することが多い。

第三、「言われる」受身文が話しことばで特に多用されている理由は、聞き手の立場に重点を置いた表現を使いつつ、話し手の発話に対する不満や文句を直接的に表現するのを避け、間接的に表現するためと考えられる。このような語用的特徴は英語や韓国語等の他の外国語とは異なる日本語特有の表現の一面を表すものと思われる。

5. おわりに

本研究では「言われる」受身文に焦点を当てて、日常生活の中に使われている用例の分析を行った。日常生活の中で最も中心になる人間同士の発話行為について、日本人母語話者が話し手と聞き手の関係をどのように捉えているかは、日本語の特徴を考える上で重要な要素であり、日本人の言語発想に関する意識を考える上で有効である。

日本語教育現場で日本語学習者が日本語の受身文の話し手と聞き手の関係を理解するのに困難を感じているケースは少なくない。本研究の結果を踏まえた上で受身文を指導する際に有情物受身文を中心に両者の関係を理解させるのは有効な方法であろう。その際に、話しことばの中で頻繁に使われている「言われる」受身文を導入することは、日本語母語話者の言語観や発想などを知る上で効果的ではないだろうか。さらに、聞き手中心的な表現を好む日本語の特徴や、日本人母語話者の発話の捉え方などを指導する際にも有効であると思われる。

注

(1) 北嶋(1977：4)では韓国語において「といわれる」表現は「-(라)고 말하여지다 /(la)go marhayeo jida/」という表現があるが、実際には「-(라)고 하다 (la)go hada/」が一般的に使われると述べた。

(2) 許(1998、2002)では話しことばの資料としてNHK連続テレビ小説「ひまわり」と韓国SBS特別企画「모래시계 /molaeshige/」の中に使われた受身文を抜粋して調査を行った。さらに、書きことばの資料としては日本語は朝日新聞の「天声人語」、韓国語は東亜日報の「횡설수설 /hwengseolsuseol/」の中に使われている受身文を抜粋して調査を行った。

(3)本稿における「話しことば」と「書きことば」という用語はそれぞれの文がどのような目的で使われているかを基準に分類した。つまり、「話しことば」とはドラマに使われた文章であり、日本人によって日本の日常生活において話されていることを前提に書かれた言葉をさし、「書きことば」は新聞のコラムとして筆者の考え方を書きことばとして綴った物をさしている。

参考文献

奥津敬一郎(1983)「何故受身か？―＜視点からのケーススタディー＞―」『国語学』第 132 号　国語学会

北嶋静江(1977)「日本語朝鮮語対照言語学の展望」『朝鮮学報』第八十五号　1-13　朝鮮学会

小泉保他(1993)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

野田尚史(1991)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

許明子(1998)「日本語と韓国語の受身文の使用に関する一考察」『日本言語学会第 116 回大会予稿集』 224-229　日本言語学会

許明子(1999)「日本語と韓国語の受身文の実証的対照研究―両国のテレビドラマと新聞コラムにおける受身文の使用率の分析を通して―」『日本語教育論集　世界の日本語教育』第 9 号　115-131　国際交流基金　日本語国際センター

許明子(2004)『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房

水谷信子(1985)『日英比較　話しことばの文法』くろしお出版

『広辞苑』第五版(1998)岩波書店

『角川類語新辞典』(1976)角川書店